特集記事　この家でこの地域で生活つづける

日記に綴った家族への想いと生活を抱いて

大阪きづがわ医療福祉生協は、組合員とその家族が住み慣れた自宅・地域でいつまでも暮らし続けることができるために、事業活動をすすめています。とりわけ高齢期をむかえると思うように身体を動かすことができなくなり、それまで難なくできていたことが困難になってしまうことがあります。わたしたちが事業圏域としている地域では、独居高齢世帯がひろがっています。異なるサービス提供を行う事業所と事業所とが連携と協力を積み重ねて、高齢期をむかえた組合員を見守り、組合員とその家族が望む住み慣れた家で、地域でいつまでも暮らし続ける。――大阪きづがわ医療福祉生協のケア実践を紹介します。

● 天六生まれ、西成育ち ――西成歴80年

京田利恵（仮名）さんは現在、訪問介護（ヘルパーステーションわかば）、訪問看護（さくら通りサテライト・レインボー）、そして通所介護（つれづれの里）の介護サービスを利用して自宅で過ごされています。また月に二度、西成民主診療所の医師が訪問診療に来て健康チェックと在宅での療養相談を受けています。

「天六で生まれたんよ。父親は消防士やっていて小さい頃西成に移ってきた。学校卒業してから銀行勤めをはじめて、昭和28年に嫁いできたのよ。お義父さんが職人さんで、私の夫（つまり息子）より筋がええからお前があと継げって言われたり、お義母さんは産婆さんでよう出産の手伝いに行ったよ。三味線は15歳からやっていた。祈祷師をしていた祖父が何処からか三味線をもらって来て、本格的に習いはじめた。一流派の師範になって一時はお弟子さんが１００人くらいいていたよ。今はそれも返上したけど師範名を流派からもらって、教えていろんなところへ演奏に出かけてたんよ」と明瞭に話をしてくれる京田さん。

戦後の高度成長期の生活史を綴った日記。後世の貴重な歴史史料になるかも…

若い頃は銀行員をされていました。とても几帳面で日記を残されています。夫が流行歌のレコードを買ってきたことや来訪者との出来事。台風被害の記述もあれば、強く関心をひいた社会事象・事件（アポロの月面着陸、浅間山荘事件、国政・地方選挙の開票情報など）の新聞の切り抜きも貼り付けられています。

● 地域での生活を支える 大阪きづがわの取り組み

ケアマネジャーの山田さんは言います。「京田さんが嫁がれたころから綴った日記の量を見て驚きました。ご本人にとって、この家とこの地域には高齢期を迎えられても鮮やかな思い出があり、亡くなられたご家族にも深い愛情を持って生活されてきたことを強く感じます。ご本人の了解を得て少し見せてもらいました。私が生まれた日（昭和38年12月21日）の記事も見つかりました。年の瀬も押し迫り、年賀状の準備をされていたことが日記から窺えます。日々の記録からは京田さんがご自宅で過ごすことにこだわり続ける思いがひしひしと伝わります。ケアプラン作成という実務にとどまらず、利用者の生きてこられたことを見つめる。その人の生活と人生を知り、そこからケアのあり方を学ぶ。それはケアマネジャーとして大切な役割だと気づかされました」

「つれづれの里で仕上げたぬりえ。きれいにできているでしょ」と得意気に話す京田さん

● デイサービスでニッコリ笑顔

毎回参加を楽しみにしている、つれづれの里の管理者・村井さんは「ぬり絵がとても上手です。力強く、それでいて細かいところまで仕上げられています。スタッフとの連絡帳にも熱心に返事をいただけます。筆まめさが出ています。京田さんの在宅生活はわたしにとって理想的です。周囲からはいろいろ心配されることがあるかも知れません。でも援助者がそうしたことを十分に認識して関わっています。ご本人にとっては充実した毎日を送られているのだと思います」と。

● いつまでもこの地域で

姪の長野友子（仮名）さんは「施設入所のことを考えたこともありました。頑固な叔母はなかなかいうことを聞いてはくれません。それだけ自分の住まいに思いがあるのでしょう。排水管の故障、野良猫の侵入もあれば、本人が転倒骨折で通院治療などトラブルには枚挙の暇がないほどです。その度に呼び出され、大変なことも多いですが、ケアマネジャーの山田さんはじめ、ヘルパーさんや看護師さん、デイサービスつれづれの里、西成民主診療所、大阪きづがわ医療福祉生協のみなさんの支援と協力に助けられています」と言われます。

大阪きづがわ医療福祉生協は、利用者の思いとその生活史を理解し、いつまでも自宅と地域で過ごせるための医療と介護の実践とその連携を深めていきます。

記事を読まれた皆様、ご感想をお寄せください。